県央史談会 令和３年７月11日(日) 史跡めぐり

〈愛川町田代地区〉

※参考資料の出典は《　》内に記しました。いろいろなものを使っていますので、文体は不統一です。

歩き出す前に　～予備知識２点と昭和18年頃の田代の略図～

その１

神奈川ふだん記89号(令和２年３月発行)に琉球大学名誉教授の小島瓔禮さんが「八菅山の伽藍創建時の古伝」を寄稿してます。それは、八菅山宝喜院42世の永寧翁の『愛甲郡地名考』を読み解いたものです。その１部を転載します。

…田代村は、昔は海底村と１村であった。今は海底は角田に属す。この２村の地は、昔は湖水であった。海底村の崖道の辺りが囲みとなり、その内側の戸倉村、海底村、田代村、平山の４ヶ所の地は、一円が湖水である。おおよそ竪１里、横20丁ばかりである。考えてみるに、昔、行基菩薩が八菅山の伽藍を建立したとき、切り割りして、湖の水を落とし尽して村里とし、田園となった。田代は湖水が田に代ったという、村名である。海底村も千尋の海が変わって村里となった名であるとあります。（中略）　今も田代の村の平地の中ほどの残草(ざるそう)に、ぽつんと山が一つ、独立峯としてあります。現代では、テンデン山と呼び、「天台山」と書いています。このテンデン山の由来にも触れています。湖の中に少し草が生えて見えたのも、水が引くと、大きな山となった。それで「残草(ザンソウ)山」と名付けたのであるとあります。…

その２

慶長８年(1603)御縄打の『相州大中郡之内上川入之内田代村水帳』に、百姓17戸の記載があります。これを田代では「13苗字17軒」と呼び、草

分けとして古くより伝承してきています。その苗字は次の通りです。

荻田(おぎた)、大矢(おおや)、高賀(こうが・現在は甲賀)、山口(やまぐち)、奈良(なら)、伊寄(いより・現在は伊従)、小座野(こざの・現在は古座野)、斎藤(さいとう)、大貫(おおぬき)、古郡(ふるごおり)、新井(あらい)、佐藤(さとう)、花上(はなうえ)の13苗字。このうち、荻田が4戸、大矢が2戸なので都合17戸(軒)になります。

《大塚博夫さんの話し》

田代の略図　我がふる里(昭和18年頃)

これは、伊従満次郎さんが田代小学校のクラス会の話題づくりに同級生の家の位置を記した昭和18年頃の田代の略図です。

ちなみに、この図には5月の史跡めぐりで歩いた清雲寺や発電所跡、塩川滝も載っています。

【見学箇所と参考資料など】

1．**平山橋**（国登録文化財）

橋長112.71m、幅員4.5mの曲弦プラットトラス構造の鋼橋です。現在の姿は3連ですが、大正2年(1913)、最初に左岸1連のみが鋼橋として造られた時は、他の部分は木橋でした。3連とも鋼橋になったのは、大正15年(1926)のことです。昭和20年(1945)7月10日、米軍機の機銃掃射を受けた時の弾痕が橋の欄干等に残っています。橋の上やその周囲で死傷者が出たこともあり、地域住民にとっては、戦争遺跡でもあります。大正期建造のリベット構造の鋼橋は、現在、少なくなっており、その稀少価値から、国登録文化財となりました。土木学会による「日本の近代土木遺産」にも選出されています。

《『愛川町の文化財』より》

稲荷森：橋の数10m上流に岩山があり、稲荷様が祭られ、大きな松が横たわっていましたが、洪水の原因になるとの理由で、宮ヶ瀬ダムができる少し前に岩山を破壊してしまいました。

天王森：更にその上流左岸に大きな松の生えた岩山がありました。この左岸堤防で、山城慎吾の「白馬童子」の撮影がありました。

（別添「我がふる里」参照）

2．舟繋場跡

石柱碑に「昔はこの近くを中津川が流れており、ここに舟をつないで出水に備えた。また非常の時のために番小屋もあったいう」とあります。

3．愛北劇場（映画館）跡

劇場は私が小学生高学年のころに大矢多門酒店の東側高台にありました。劇場内では、魚かん(魚屋)のおじいさんが菓子などを販売していました。

4．大矢酒造株式会社の酒蔵跡

銘酒「東の誉」の酒蔵は、現在コメリの店舗のあるところと道路の反対側のコンビニのところにありました。コンビニは矢酒造株式会社が自ら営んでいます。

（別添「我がふる里」参照）

5．関場坂

石柱碑に「昔の番所があったと伝えられる関場前を通る坂の意。また、この坂は巡見使が通行した道の一部である」とあります。

6．鍛冶屋原の道標

この辺り一帯を鍛冶屋原という。

琴平社（鍛冶屋原の道標より北にある　大字田代字下原846番地）

通称かじや原に南面して祀られている。中宮には、奉祀琴平神社神霊　昭和９年11月10日　神職甲賀金蔵　と記された神札が納められている。

このこんぴさまは奈良一族11戸で信仰する社で、10月10日を祭日として祭祀してきている。

《『愛川町の小祠・小堂　田代・細野地区』》

７．上原の道標

この道は、かつての甲州道であった。厚木市上荻野の打越(おっこし)から、当町の海底(おぞこう)を経て、中津川をわたり、関場坂からここに至り、それから志田峠を越え、津久井の鼠坂(ねんざか)の関所を過ぎて吉野宿へと通じる。小田原からの甲州への通路であった。

道標には、「甲州道中」「右よしのねんさか道」とあり、江戸中期頃の建立とさている。

また、近世には、領主の使臣が村むらを巡視する道すじであったことから「巡見道(じゅんけんみち)」とも呼ばれ、ほかに「津久井道」「志田道」の名もあった。

《昭和59年２月愛川町教育院会設置看板》

８．荻田政之助の生家

【別添】『黄色いチラシ』№75「異文化の世界に生きた明治生まれの男」

【参考】飯田孝著『相模人国記』に「厚木・愛甲の歴史を彩った百人」の一人として掲載れています。

９．上原の庚申塔（町域最古の庚申塔）

寛文(かんぶん)８年(1668)造立の田代上原(たしろうえはら)地区にある庚申塔(こうしんとう)です。町域庚申塔のなかで最古のものです。高さ102cm、幅42cm、厚さ18cm。碑面には神像(しんぞう)とも仏像ともとれる異形像(いぎょうぞう)が浮彫りされていて、初期庚申塔の一形態を示しています。下部には三猿に「相州愛光郡上川入田代村」の銘が刻まれています。

庚申とは干支(えと)で60日に一度廻ってくる庚(かのえ)と申(さる)の組み合わさった日で、中国の道教では、この夜に眠ると命が縮まるとされます。影響を受けたわが国でも、眠らずに酒食をともにする庚申待(こうしんまち)という信仰行事が、行われるようになりました。また、当時、庚申待の構成員によって、このような庚申塔を建てる習慣が盛んになりました。

《『愛川町の文化財』》

山王社（庚申塔の階段上　大字田代字上の原1060番地）

ここは旧街道で、江戸へ炭や絹、鮎などを運搬するのに一息いれる馬

方茶屋のあったところ。中宮には、３猿の陽刻された台座(巾22cm)に座す石造の神像(高さ34cm)１体が納められている。その台座には向って右側に寛政丁巳９年９月吉日　左側に田代村神主　荻田重郎右衛門　と銘記されていて、神像の尊容は美しい。また流れ向拝造りの中宮にも、寛政７卯３月23日成就　相州棚沢村　橘川富次郎作之　と墨書の銘がある。

《『愛川町の小祠・小堂　田代・細野地区』》

【参考】厚木市の最古は寛永９年(1632)、林の大坂の通称山王社

10. 胴塚

永禄12(1569)年10月、当町三増の原で行われた「三増合戦」は、甲州の武田、小田原の北条両軍が、力を尽くしての戦いだったようで、ともに多くの戦死者が出た。

そのおり、討ち取られた首級は、ここから150メートルほど上手の土手のうえに葬られ「首塚」としてまつられているが、首級を除いた遺骨は、すぐ下の志田沢の右岸わきに埋葬され、塚を築いてそのしるしとした。

この地では、それを「胴塚」と呼び、三増合戦ゆかりにひとつとして今に伝えている。

《平成７年３月愛川町教育院会設置看板》

11. 首塚

不動明王を祀る小高い所を首塚という。宝永３年(1706)建立の供養塔がある。

このあたりは、三増(みませ)合戦(1569)のおり、志田沢沿いに下ってきた武田方の山縣(やまがた)遊軍が、北条軍の虚をつき背後から討って出て、それまで敗色の濃かった武田方を一挙に勝利に導くきっかけをつくったところという。

この戦いのあと、戦死者の首を葬ったといわれるのが首塚であり、道をへだてた森の中には、胴を葬ったという胴塚がある。

なお、三増合戦での戦死者は北条方3,269人、武田方900人と伝えられる。

《愛川町教育委員会看板》

不動堂（大字田代字上の原1081番地）

堂内には、石の角塔に浮き彫りされた不動明王像(38×28×95)が祀られている。塔身の側面には、弘化２泡集乙巳３月令旦　当所　と刻され、台石の正面に　講中　と大記し、その左右側面に講中の21名の名が刻まれている。ちなみにこの位置は志田峠に通ずる旧大山道であり、また、旧田代村と旧三増村の村境いにもあたる。

《『愛川町の小祠・小堂　田代・細野地区』》

12. 田代城址

田代城は戦国時代の山城で、自然の地形を利して防備した武士の居館(きょかん)であった。

築城の年月は不詳。城域主要部は現在の愛川中学校一帯で、23,300平方メートルほどの広さであったと伝わり、南の方を表口とした。

城主は小田原北条氏の家臣内藤氏で、下野守秀勝とその子三郎兵衛秀行の２代が在城し、田代・半原・小曽郷(おぞこう)(海底)・隅田(すみだ)(角田)・箕輪・下村・坂本・五坊(ごぼう)(北原)・磯部を領地としていた。

永禄12年(1569)10月、武田信玄小田原攻めのおりに、この城は落城したと伝えられる。

城址には石塁跡と守護神の八幡社があり、仕置場(しおきば)、うまやなど地名を残している。

《昭和55年12月愛川町教育委員会設置看板》

【別添】①『神奈川中世城郭図鑑』(西股総生・松岡進・田嶌貴久美著)

②『新編相模国風土記稿』に載る「田城古城図」

②に掲載の**西光寺**は上田代1428番地にあった寺で、愛川中学校校庭の南側のすみがその寺跡。道を隔てて南側下の荻田虎十郎宅に「テラシタ」という家名が残っています。宗派は古義真言宗、山号は富士居山、本尊は大日如来、本寺は半原村清瀧寺(廃寺)で、富士居山にあった浅間大菩薩の別当寺でした。

また、**十王堂**は、その草創の年は不祥ですが、宝永３年(1706)の『愛

甲郡田代村差出』に「十王堂　壱ヶ所」との記載があります。新編相模国風土記稿には、「十王堂　勝楽寺持」と載せられ、遺物の十王堂(石造)などは勝楽寺に移管されています。

八幡社

この地を領した内藤氏が田代城を築くにあたり、角田村の八幡社の分霊を勧請し館の鬼門除けにしたという伝承がある。

八幡社のタブノキ

タブノキはクスノキ科の常緑高木で、常緑広葉樹林を構成する有力樹種の一つです。自生の中心は本州中央部以南の海に近い暖地で、本町は自生地の北限に位置します。田代八幡神社のタブノキは、社叢林として守られ、稀に見る樹齢を保っています。

《『愛川町の文化財』より》

13. **子安社**（大字田代字西原　1507番地）

現在字西谷戸の中腹に南面して建てられいるが、もとは字残草624番地に鎮座していた。明治の初期に中津川の流路を変更した際、いまの地に移されたという。当時そのあたりは中津川の川べりで、『子安の森』とよばれていた。

この旧子安社の位置は、裏残草にある奈良工務店の西方にある水田の一画で、そこだけ岩盤が露出しているのですぐに知れる。社地の広さは40平方メートルほどで、すぐ前は中津川の深淵であったといわれる。

俚伝によれば、この子安の森は良弁僧正（奈良東大寺の初代別当で大山寺の開創者・689～773）が相模国に巡錫のみぎり、ここに立って西方を望むと、山脈のなかに瑞祥がみとめられたので、そこを聖地として今大山不動院清瀧寺(せいりょうじ)の建立を思いたったという所縁の地である。

また、子安の森のいわれとしてつぎのような伝説もある。戦国のころ、田代城主内藤三郎兵衛秀勝の息女が故あって中津川の淵に身を投げた。秀勝はそれを不憫に思いわが子安かれとねんごろにその跡をとむらった。のちに入水の地を人々は『子安の森』と称するようになった。

この社祠の内には、子安明神と豊川稲荷が合祀されている。

《『愛川町の小祠・小堂　田代・細野地区』》

また、小島瓔禮さんが『神奈川ふだん記』82号に「良弁僧正ゆかりの如意輪観音像」と題して寄稿しています。そこに、この子安の森が出てきます。その部分を転載します。

…まず良弁の生い立ちが下地にあります。もともと良弁は染屋太郎大夫時忠の子どもで、子どもがない時忠が如意輪観音に祈願して一子を得た、それが良弁であるといいます。良弁はある夜夢を見ます。如意輪観音が姿を現わして、川上から大木が来るから、それで我が像を刻めといいって昇天したといいます。如意輪観音のお告げです。

そこで良弁は中津川のほとり、田代河原に庵を結び、断食して修行をします。結願の前夜、川の水が大いに増し、濁流が滔々として流木がとても多い中に、幽木と覚しい大木が庵の前で止まりました。これこそ昨夜観音菩薩が意を宣したものであると、その材で日夜怠ることなく彫刻したのが、いまの尊像であるというのです。この像は、もとは清瀧寺にあったが、その後、字樫原の観音堂に納まり、（中略）　明治時代の末ごろに堂宇が腐朽したので、清雲寺に移したとあります。…

【別添】『黄色いチラシ』№368「明王嶽から展望」(清瀧寺について)

14. 大矢酒造株式会社（住宅・店舗跡）元清酒「東の誉」醸造元

田代の大矢姓の総本家といわれる大矢孝家より分かれた家筋といわれ、旗本太田氏の知行下であった田代で、享保期より明治維新まで代々名主役を務めてきた家柄である。この大矢家から名主の大矢万四郎・大矢武平、田代村戸長の大矢鵬三郎、田代村長の大矢武兵衛など行政・産業振興に尽くした人が出た。特に大矢武兵衛は郡会議員・県会議員をもつとめ、大正12年の関東大震災の際には、厚木町(厚木市)の羅被者救援のため米150俵を供出して信望があった。

《角川書店『神奈川県姓氏家系辞典』》

天明８年(1788)正月６日に**「土平治騒動」**の打ち壊しにあった。また、昭和27年の**映画「人生劇場」**(監督：佐分利信、主演：舟橋元）の撮影場所ともなった。

15. 中津神社

神社の由緒

勧請年月不詳なるも本神社は文治の頃より存在せること記録によりて明らかなり(文治年間　後鳥羽時代で約811年前)。その後此の地毛利の庄たり。長享年中北條長氏伊豆に興り、其の勢い、本州に威なり、弘治３乙卯年８月本村及び近傍の其臣内藤下野守秀勝の所領となる。依て内藤氏は字、上田代富士山麓なる天然の要地を囲み城を築きて居住す。而して本神社を氏神として信仰せられたり。内藤氏居を本地に定めらるるや次第に住民も増加し、神社の尊厳を高め祭祀の方法も定まれり、往時は中津川清流の中心にして、孤嶽をなしており、小嶽明神と唱え、御祭神は、大日霎命を祀り、旧田代村の総鎮守たり。

境内に東照宮、八坂神社、稲荷社、金毘羅社の４社を祀る。東照宮は天正年中(423年前)入国の節、又左衛門ほか２名なるもの三河国より供仕の由緒により勧請、明治６年示達に基き部内に存在せる八幡神社、日枝神社、浅間神社、蔵王神社の４柱を合祀し、祭祀の方法を確立し、永遠維持の基礎を定めて、中津神社と改称され殊に合祀社の内、八幡神社、浅間神社は内藤氏の守護神にて武運長久を祈願せられ、特に八幡神社には２石の御朱印を下し賜った。

又、当村は中津川流域の中心にし孤嶽を残し、中州をなして曽って洪水を受けた事なし、中津の称はこれより来る。

爾来、諸般の設備ととのい、基本財産確立せるにより大正４年３月23日神奈川県告示を以って村社に昇格する。戦後昭和21年８月１日届出により、宗教法人となる。

《鳥居横の掲示板　平成８年７月吉日の「神社の由緒」》

16. 大矢孝酒造株式会社　清酒「蓬莱」醸造元

田代の大矢姓の総本家といわれる大矢孝家は、江戸初期より享保年間ころまで代々名主をつとめてきた家柄で、祖は大矢彦四郎宗安と伝える。宗安は、小田原北条氏の半役被仰付衆で田代を知行所の一としていた内藤三郎兵衛の臣で、小田原北条氏の滅亡後に田代へ土着したという。以

後代々にわたり名主役をつとめ、そのうちの一人である大矢善左衛門は、曹洞宗孤嶽山長福寺（現在は廃寺）の開基となった。

《角川書店『神奈川県姓氏家系辞典』》

酒造業は文政13年(1830)創業で、丹沢水系の伏流水を仕込み水に使用した地酒を造っています。以前『黄色いチラシ』で寒仕込み見学会を開いていた邦明社長(飯田孝さんと厚高同級生)の頃は、新潟から杜氏がチームを組んできていましたが、いまは息子の俊介さんが社長となり、平成18年(2016)から社員で酒造りをしています。

17. 柳下亭牛将の句碑（田代小学校敷地内）

牛将は蟹殿洞々の門下で、関西、中部、関東を一巡したのちむこう辻（14. 舟着場の道標近く）の柳樹の下に居を構えたので、柳下亭と号し、「荻野のトートー、田代のモウモウ」と称された。

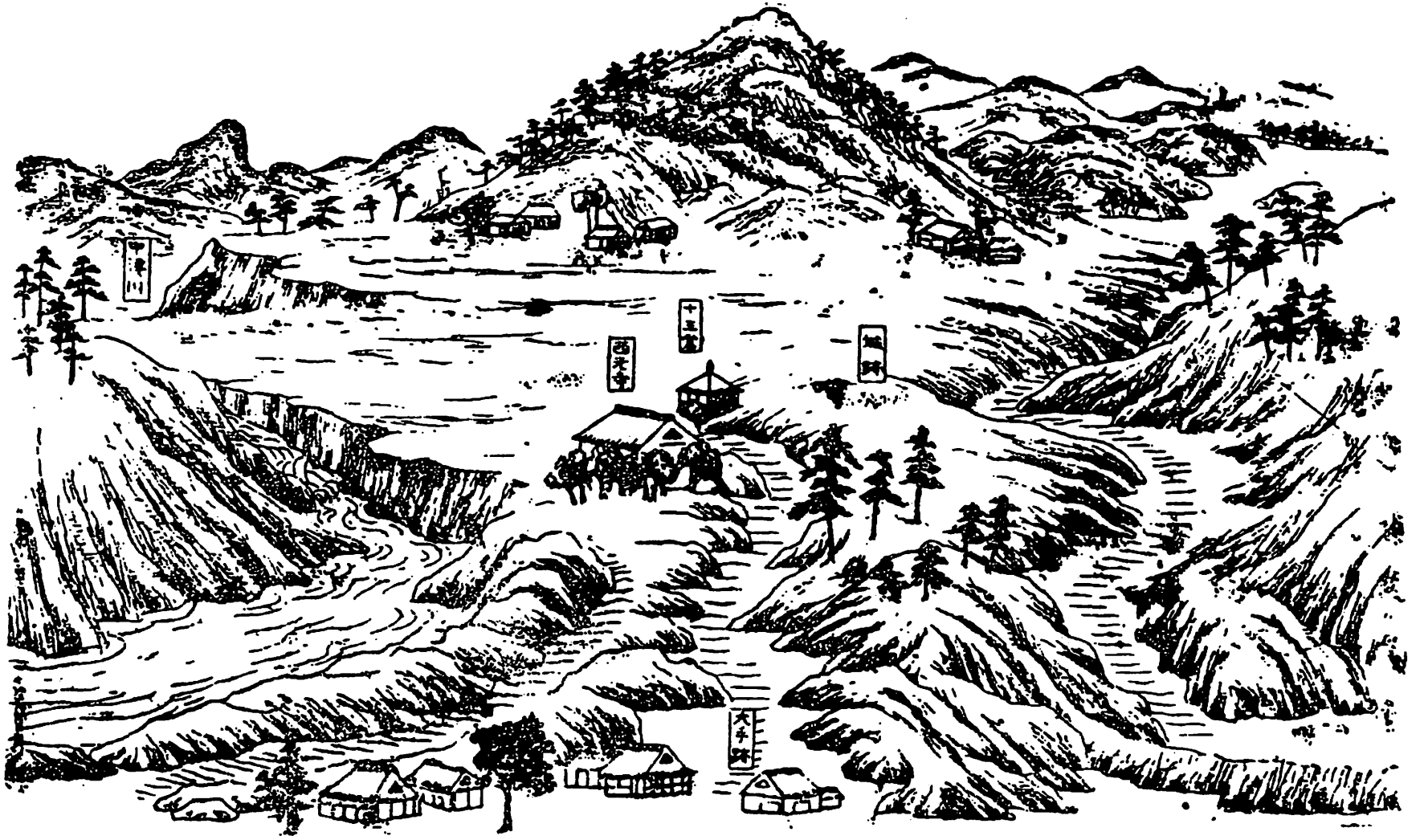
句碑の〈おもしろい幕があいたそ松かさり〉は、幕末ペリー来航の時代を背景として詠ったものであるという、即ち欧米諸国はしばしば我が国に開国させようと試みたが、鎖国は祖法であるという幕府の拒否にあって失敗した。しかし米のペリーが来航するに及んで鎖国は砕られ遂に日米和親条約を結び開国への一歩を踏み出した。さあこれから世の風雲に乗ずることもできるおもしろい世の中だぞ。開国日本の夜明けだぞ。加えて今日はめでたい元朝だぞと希望に満ちた心境を表わしたものであろう。

元ここは、廃寺になった勝楽寺の隠居寺長福寺があった。

《『愛川町古今俳句集成』》

【見逃さないで】

ＮＨＫＢＳプレミアム(ＢＳ３)の**「英雄たちの選択」**(毎週水曜日・午後８時～９時）は、７月14日(水)に「戦国最大の山岳戦・三増峠の戦い～北条氏康ＶＳ武田信玄～」を放送します。

ぜひ、ご覧ください。

田城古城圖